

平成30年度 学校・家庭・地域連携サポート事業

# 県北地区学校支援実践研修会

主催：福島県教育委員会

**目 的：**学校関係者、PTA、社会教育行政関係者、コーディネーター、ボランティア等、様々な立場から学校支援活動に対する生の声を交換し合い、継続的、安定的な学校支援活動を行うための方向性を考える。

**日 時：**平成30年11月27日（火）13：45～16：15

**場 所：**大玉村農村環境改善センター

## 講 話 「双方向の学校支援活動へ」

福島県教育庁社会教育課 社会教育主事兼指導主事 双里 義和

ア 「頑張る学校応援プラン」主要施策3 地域と共にある学校

① 地域と学校の協働の促進

- ・ 大玉村も含めた8地域で実施している地域学校協働活動事業の成果を普及・促進していく。

② コミュニティ・スクールの促進

- ・ 成果共有の場の設定や、設置を検討している市町村への復興教育アドバイザーによる助言を行っている。今後、高校での取組も検討していく。

③ 地域学校活性化推進構想の策定

- ・ 地域学校協働活動事業やコミュニティ・スクールの成果の分析により、「地域学校活性化推進構想」を策定・推進していく。

イ 地域学校協働活動事業とは

- ① 地域と学校のパートナーシップにより、双方向の活動をする取組で、学校と地域住民との連携協力体制づくりを構築し、社会総がかりでの教育の実現を目指す。

② 主に次の3つの内容に分類される。

- A 子どもたちが地域を知る活動
- B 地域と学校との協働活動
- C 子どもたちが地域に貢献する活動

ウ 地域と学校が連携する必要性とは

- ① 地域の教育力の低下が叫ばれ、家庭教育の充実が求められる中、地域の教育力の向上が必要になっている。また、学校が抱える課題の複雑化や困難化に伴い、社会総がかりで対応していくことが求められている。

これからの厳しい時代を生き抜く力を育成していくために、学校と地域がパートナーとして連携・協働するための組織的・継続的な仕組みが必要とされてくる。

- ② 新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、学校で育むべき資質・能力を社会と共有することを重視している。



## エ 地域と学校が連携・協働することでの効果

### ① 児童・生徒にとって期待される効果

- ・ 専門的な知識や技能をもつ地域の方々の支援により、学びが充実するとともに、学習意欲の喚起が図られる。
- ・ 学校、家庭以外の多くの方々から認められ、励まされることにより、自尊感情や自己肯定感が芽生える。
- ・ 地域の方々との関わりから、地域への愛着が芽生え、地域の担い手としての自覚が生まれる。

→ 児童生徒への効果（「H27 地域学校協働活動に関するアンケート」文部科学省・国立教育政策研究所）

- ・ 地域住民との交流により、様々な体験や経験が増えた。それにより、89%の児童生徒が「コミュニケーション能力の向上につながった」と感じている。また、90%の児童生徒が「地域への理解、関心を深まった」と回答している。さらに、安心感や自己肯定感の形成や学校に対する理解にもつながっているなどの効果が見られる。

### ② 学校・教職員にとって期待できる効果

- ・ 地域の方々の多様な視点や地域資源を生かし、充実した教育活動が展開できる。
- ・ 日頃から学校と地域が連携して様々な教育活動を推進していくことで、学校と地域の良好な信頼関係が構築される。
- ・ 地域の教育資源を知るとともに、地域の方々が学校の応援団であることを実感できる。
- ・ 学校の課題等に対して、地域の方々だからできること、地域の方々にしかできないことを役割分担することができる。



→ 学校・教職員への効果（「H27 地域学校協働活動に関するアンケート」文部科学省・国立教育政策研究所）

- ・ 地域住民が学校を支援することにより「教員が授業や生徒指導により力を注ぐことができた」と感じている教職員の割合が71%であった。
- ・ 学校にとって多忙化等の負担になるという当初の懸念を考慮しても、地域と学校が連携、協働して子どもたちを育てるというメリットが非常に大きいと理解され始めている。

### ③ 地域にとって期待される効果

- ・ 地域の子どもたちを地域全体で育てていこうという意識が高まり、地域の教育力の向上につながっていく。
- ・ 学校支援をきっかけとした地域活動の活性化が、活力ある地域コミュニティづくりにつながる。
- ・ 自分の経験や知識を生かす機会が得られることで、地域住民の自己有用感や生きがいに結びついていく。

→ 地域への効果（「H27 地域学校協働活動に関するアンケート」文部科学省・国立教育政策研究所）

- ・ 地域住民が学校を支援することにより、「地域の教育力が向上し、地域の活性化につながった」と70%の方が回答している。また、74%の方が「地域住民の生きがいづくりや自己実現につながった」と答えている。顔の見える関係づくりが実現し、学校を核にしたコミュニティが生まれていることが伺える。

## オ 地域と学校の連携・協働の視点

- ① 地域の人材を生かす（学校支援ボランティア、企業や高等教育機関との連携）
- ② 地域の資源を生かす（地域資源の活用、社会教育施設の活用）
- ③ 地域へ参画する（地域でのボランティア活動、地域の団体や行政等との連携）
- ④ 学校の力を生かす（学校の教育力を生かした活動、学校施設を生かした活動と交流）

## カ 地域学校協働活動の体制づくり

地域には地域コーディネーターを、学校には地域との連携の窓口となる地域連携担当教職員を置き、地域全体で教育に取り組む双方向の協働体制を進める。

## キ まとめ

地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支えていくために、今までの地域から学校への支援として行われてきた一方の「支援」だけでなく「連携・協働」していくことが求められてくる。また、「個別の活動」から「総合化・ネットワーク化」へ転換するようになっていく。そのようにして、学校・家庭・地域が連携し、「地域と共にある学校」や「学校を核とした地域づくり」を目指していくことになる。

## 事例発表 大玉村学校支援コーディネーター 笹山 仁子 氏

### ア はじめに

大玉村における学校支援事業は、10年目を迎えている。学校支援ボランティア活動を通して、地域と社会が双方の学びをより深めるために取り組んでいるところである。活動実績においても、昨年度よりボランティア登録数も増えている。また、要請件数も現時点で昨年度とほぼ同数に達している。

### イ 地域からの学校支援

#### ①幼稚園

- 運動会の予行練習などの幼稚園行事の補助、園外保育の引率、プールの見守りなどを支援した。また、発表会の衣装作り、交通安全教室の補助、絵本の読み聞かせも支援している。

#### ②小学校

- 体験活動の支援では、邦楽教室の講師を地域の人材が務めている。尺八や三味線、琴の授業を担当した。また、ミシンを使用する授業や算数の丸つけなどを補助する支援も行っている。校庭の樹木の剪定も支援の一つである。

#### ③中学校

- 家庭科の授業における浴衣の着付け、伝統工芸品製作、そば打ち体験の支援を行っている。

### ウ 学校から地域への支援

- 玉井小学校4学年の総合的な学習の時間において、地域の桜である馬場桜保存会会長に授業をしていただいた。その結果、児童が自分たちにもできることを考え、保存会への「弟子入り」につながった。地域の文化に触れ、興味・関心を持ち、行動に移すことができた事例である。

### エ 保護者との連携・協力

#### ①全国植樹祭にむけて

- 全国植樹祭において、大玉村で引き継がれている「田植え踊り」の実演をする機会があった。毎年、学習発表会で5学年が発表している踊りである。事前準備の着付けは、学校支援ボランティアや保護者の少ない人数で行っていたが、植樹祭の実演では、着付けの時間が心配であった。その心配を解消するために、事前にボランティアの方に対して「田植え踊り保存会」の皆様に着付けを教えてもらう時間を設けた。その結果、着付け時間の短縮につながり、本番でも円滑に着付けを行うことができた。

#### ②持続可能にするために（学習発表会にむけて）

- 村の伝統文化を子どもたちに伝えていくためにも、学習発表会での「田植え踊り」の発表を継続していきたい。そのためには学校支援ボランティアの他に、より多くの保護者の協力が必要で





ある。例年、保護者に対し「着付け協力」ということで募集の通知を出していたが、なかなか集まらなかった。その課題を解決するために、保護者への依頼方法を「わが子のために、わが子の着付けを…」に変え、発表学年の5年生の保護者に協力を依頼した。また、着付けの経験がない保護者が多いことも集まらない原因と考えたので、「田植え踊り保存会」による着付け講習会も開催した。

その結果、ボランティアに加わった地域の方や保護者、教職員、着付けしてもらおう子どもが、共に学び、共に頑張る活動につながった。また、やりがいや達成感を感じることができる実践となった。地域にとっても、「田植え踊り」の継承、「田植え踊り保存会」の発展にもつながり、双方にとってプラスになった学校支援の取組となった。

オ まとめ

子どもと大人が一緒になって学び、育ち合える取組は、学びの還元と循環につながる。そのような取組こそが、継続的で安定的な学校支援につながり、地域の活性化にもなると考えている。今後も継続して取り組んでいきたい。

## パネルディスカッション 「継続的・安定的な学校支援活動を行うために」

- コーディネーター 佐藤 勇人氏（大玉村統括コーディネーター兼地域コーディネーター）
- パネラー 今野 裕三氏（大玉村地域連携担当教職員）
- 笹山 仁子氏（大玉村学校支援コーディネーター）
- 佐瀬 桂子氏（大玉村学校支援ボランティア）
- 佐久間敏彦氏（福島市教育委員会生涯学習指導員）

### 【パネルディスカッションの実際】

（佐 藤） 本日の研修会のタイトルは、「未来軸で学校支援活動を考える」となっています。今回のパネルディスカッションでは、これからの社会の変化に目を向けて、学校支援活動を「持続的・継続的」なものにしていくために参加者全員で意見や考えを出し合いたいと思います。そして、学校と地域社会が連携して未来を担う子どもたちのために何ができるかを多面的に検証していきたいと思います。

それでは、それぞれの役割、立場から学校支援活動の良さと難しさを発表していただきます。

（今 野） 学校の要請に応じて、そば打ちや稲作などの体験活動を支援してくださるボランティアの方と打合せを行ったり、企業の方々に職場体験の受け入れを依頼したりしました。また、大学や専門学校と連携してキャリア教育を推進するための連絡・調整も行いました。私が、教職員との連携をサポートすることで、教職員の負担を減らし、教育活動を充実できることが良さだと感じます。難しさは、ボランティアの方々の高齢化により、お願いできる人が限られてきていることです。

（佐 藤） 今野先生は、大玉村の地域連携担当教職員として活動されていますが、中学校以外で、幼稚園や小学校についてはいかがですか。

（今 野） 私の所属が中学校なので、幼稚園や小学校への関わりは、中学校と比べると少ないです。今後、幼稚園や小学校の先生方との連携を深め、打合せの時間などを増やしていきたいと考えています。

（佐 藤） 笹山さんは、学校支援コーディネーターとして活動されてきていますが、いかがですか。

（笹 山） 4月からコーディネーターになり、日々勉強の毎日です。中学校のそば打ちでは、数多くの村民の方に協力をいただきました。子どもたちが地域の方々



に支援を受けることは幸せなことだと思います。互いに交流することで心が豊かになり、郷土愛も育まれると思います。ボランティアの方々のアンケートを見ると、率直な思いを知ることができます。

(佐 藤) 難しさや悩みについて、もう少し、詳しくお話しください。

(笹 山) 学校や幼稚園からの要望が多様化しており、何をどこまで学校支援活動で行うべきなのか迷うところです。また、環境整備や印刷・丁合、整地作業など、直接子どもに関わらない要請もあります。それらは、ボランティアが行うべきものなのか、本当に子どものためになるのか、悩むところです。

(佐 藤) 次に、大玉村で学習支援ボランティアを行っている佐瀬さん、お願いします。

(佐 瀬) 子どもたちが喜ぶ姿が、ボランティアを行う原動力になっています。お礼として、子どもたちから手作りのメダルをもらったことがありました。そのような子どもたちの心が、私の生きがいになっています。学校支援そのものが、学校と地域ボランティアの双方に利点をもたらしていると思います。

(佐 藤) 佐瀬さんが生きがいを感じて前向きに取り組んでいる様子を感じられました。また、「もちつ、もたれつ」の心が突破口であるように感じました。

さらに、このようなところがもう少しあればいいな、ということがあればお話しください。

(佐 瀬) ボランティアをやっていて困っていることや辛いことは、特にありません。子どもたちの頑張りや、先生方が子どもたちのために一生懸命に取り組んでいる姿を見ることが、私の心の栄養になり、自分の成長につながっています。

(佐 藤) 持続可能な学校支援活動にするための難しさや課題はないでしょうか。

(佐 瀬) ボランティアとして、担任の先生のやりたいことを尊重しています。ただ、目が行き届かない部分や手が回らないこともあると思うので、そのような「かゆいところ」を、手厚く支援できればよいと思っています。

(佐 藤) 昨年度、この研修会を開催した福島市から、佐久間指導員が参加しておりますので、行政の立場から、学校支援活動の課題解消の方策も含めてお話しください。



(佐久間) 福島市では、教育委員会の重点事項として、平成28年度から学校支援地域本部事業が始まりました。福島市の柱は3点あります。1つ目は、市内の小・中・特別支援学校70校を全て対象にすること。2つ目は、学校の要望を優先させること。3つ目は、市内に16ある学習センターの生涯学習指導員が地域コーディネーターを兼務することです。学校支援活動の目的や効果を理解していただくために、地域コーディネーターが市内全ての小・中・特別支援学校へ説明に行きました。しかし、各学校からは、「学力向上、生徒指導、進路指導、部活動、保護者対応などでいっぱい、もうこれ以上入りません」という不要論が上がりました。「いつやるの?」「誰がやるの?」という声もありました。それでも、あらゆる声に丁寧にお答えをして、理解を得るように努めました。

最初のボランティア依頼が来たのは、「昔遊び」の学習支援でした。年間を通じて学校へ出向いて取材を行い、学校支援活動のメリットを情報発信しました。その結果、平成28年度は、小学校20校、中学校3校から要請がありました。また、全ての学校の校長先生と面談を行い、学校支援活動に対するご意見をいただきました。活動して終わりではなく、評価をして次につなげることが大切だと思います。平成29年度は、小学校36校、中学校7校の利用がありました。じわじわと広げていくことの大切さを実感しています。

福島市では、現在570名のボランティアが活動しています。安心して学校に出向いてもら

うように、全員がボランティア活動保険に加入するシステムをとっています。中学校では、学校支援活動がなかなか進んでいませんが、地域学校協働活動の調査を見ると、地域行事や福祉施設での演奏発表会など、地域に貢献する活動を多く行っています。そのような取組も、双方向の学校支援活動として評価できると考えています。

- (佐藤) 新学習指導要領に掲げられている「社会に開かれた教育課程」をどのように展開していくか、お聞かせください。
- (今野) 今年度は、村の直売所で販売する野菜を使ったレシピ作りや、コマーシャル作成などを中学校の授業に取り入れてきました。そのように、学校から地域に発信し、地域の方々と協力・連携していく学習活動を教育課程に組み入れていきたいと考えています。
- (佐藤) ここで、会場の皆様からご意見をいただきたいと思います。大玉中学校の鈴木校長先生、地域に対する貢献についてお話をお聞かせください。
- (鈴木) 生徒が地域貢献活動を行う上で、地域の方々が協力的で大変助かっています。より効果的に地域に貢献する活動を行っていくためにも、新学習指導要領の改訂の趣旨や「社会に開かれた教育課程」の理念や概要を、地域の方々にもしっかり説明することが必要だと思います。そして、子どもたちのために、地域と学校が連携・協働して、教育活動を推進していくという意識を教職員にもたせるようにしていきます。
- (佐藤) 小学校の立場からご意見をお聞きしたいと思います。地区小学校長会長の松井校長先生、いかがでしょうか。
- (松井) 本校(本宮小学校)では、家庭科のミシンの補助など、地域の方々に協力をいただいております。大変助かっています。子どもの安心、安全とともに教員の負担軽減にもつながっています。
- 単純に「昨年行ったので、今年も願う」ではなくて、(気持ちのよい挨拶や感謝の気持ち、失敗しても大丈夫という考え方など)子どもたちの将来に向けてどんな力をつけさせたいのかを、学校、家庭、地域が互いに共有して取り組んでいきたいと思っています。
- 本校では、ホームページを活用して、学校支援活動の様子を保護者や地域の方々に見えるようにしています。
- また、教職員には、地域の子どもたちをみんなで育てているという意識をもたせるようにしています。学校支援活動を通して、子どもたちが笑顔になり、地域の方々も「おらが学校」に来て良かったと思えるようにしていきたいです。
- ただし、あれもこれもできないので、限られた時間と人材の中で、持続可能な学校支援活動にしていくために、内容の精査も必要になってくると思っています。
- (佐藤) 他の市町村の状況をお聞きしたいと思います。国見町ではいかがでしょうか。半澤係長、お願いいたします。
- (半澤) 学校の教育ニーズに相応したボランティア人材をいかに集めるかを、コーディネーターが悩みながら進めています。また、学校は前日にならないと時間帯が分からないというときも多く、コーディネーターが対応に苦慮しています。学校が忙しいのも分かりますが、ある程度見通しをもってコーディネートできればよいと思います。さらに、限りある人材の中で、学校の要望する人材や教育効果を本当に提供できているのか、日々悩んでいるところです。そのような中ではありますが、国見町のボランティアの皆さんは、子どもたちのために本当によく頑張っています。
- (佐藤) 福島市の三河台学習センターの吉田指導員から様子をお聞きしたいと思います。
- (吉田) 福島市では、平成30年4月に「学校支援ハンドブック」を作成しました。ハンドブックを活用することで、担当者の異動があっても、円滑に対





応できるようにしています。学校の要望に応える人材を探すために、各種会議に出向き、学習センター利用団体の長や町内会長等をお願いをしています。また、学習センターを利用している書道クラブの方々をお願いして、書写指導の学習支援が実現した例もあります。ボランティアをしてくださった皆さんは、「自分たちももっと学ばなくてはいけない」と感想を述べておられました。子どもたちと関わることで、皆さんの生きがいや、やりがいにつながっていると感じています。

(佐藤) それでは、最後に、学校支援活動事業を継続的、安定的に進めていくためには、どうすればよいか、パネラーの方々にご意見をいただきたいと思います。

(今野) ボランティアの後継者の育成が必要になってくると感じています。そのために、保護者が学校支援に関われるような機会を増やしていければと思います。

(笹山) 学校と地域が連携することで、みんなが笑顔になります。コーディネーターとして、とてもやりがいを感じています。これからも継続的、安定的に学校支援活動を行っていくためには、学校と地域が共通した認識で行っていくことが大切だと思います。また、人と人との関わりの中で成り立っているので、お互いが尊敬や感謝の気持ちを忘れないようにしていければよいと思っています。

(佐瀬) 私たちは、特別なことを要求されているわけではないと思っています。学校と地域の連携プレーができるように、パイプをつなげる努力をしていきたいです。これからも、ボランティアという立場で、ぬくもりを送り合いながら、子どもたちの成長に関わっていきたいと思います。

(佐久間) 2点述べます。1点目は、人間関係をより良いものにしていくことです。コーディネーターと校長、コーディネーターとボランティアなどが何でも言い合える関係になることです。そして、学校の実態に寄り添った支援を行う、それが土台になると思います。

2点目は、事業の評価を行って、結果と改善策を示すことです。学校と地域が成果と課題を共有して同じ方向を向いて進めていくことが、継続的、安定的な学校支援活動につながっていくと考えます。

(佐藤) 各パネラーの皆さんの提言が、学校支援活動事業を継続的、安定的に進めていくためのヒントになったと思います。ここでは、結論は出しませんので、さらにグループ協議で話し合いを深めてほしいと思います。

## グループ協議 「継続的・安定的な学校支援活動を行うために」

### ～それぞれの現場が抱える課題を出し合い、意見を交換する

ア 学校支援活動の課題や悩み、疑問点や要望を出し合う

【課題や悩み】

- 先生方が疲れている。学校支援活動までの段取りをまとめることの難しさが、中心的な役割の方も嫌がる要因になっている。
- 「社会に開かれた教育課程」の趣旨を地域へ伝える難しさがある。研修会などを開催しても、参加率が低い。
- いかにも、学校側へ、学校支援の意義や有用性を伝えて、理解を得るか。
- 保護者を巻き込んで様々な活動を行いたいですが、ボランティア登録のない方は保険の問題がある。
- 支援の計画が整いすぎていると、「やらされ感」があり、子どもたちは逆にのってこない。
- 学校とボランティアの打合せの時間がなかなか確保しにくい。調整が難しい。
- ボランティアの高齢化が課題である。それぞれの分野で後継者が不足している。等。

### 【疑問点】

- ・ 何を目的にするのか。Win-Win の関係にならないと、計画が止まってしまう可能性がある。
- ・ 学校の多忙化解消に「学校支援」は有効なのか。また、ボランティアさんのやりがいにつながるのか。
- ・ ボランティア活動を通して、自分たちが学ぶ機会となっているか。
- ・ 学校支援活動が、地域にどのような効果を及ぼしているのかについて、何を根拠に検証すればいいのか。
- ・ 学校の要望に合った支援が本当にできているのか疑問を感じている。等。

### 【要望】

- ・ 目的の共有化をどうするか。ねらいを明らかにして共有し、計画をしないと子どもが困る。
- ・ 学校支援に関しての、学校の本音を聞きたい。
- ・ 学校支援活動が終わった時点で、学校とボランティアとで反省を行い、一言でも話し合いができれば次につながるのではないか。
- ・ 学校支援ボランティアは単なる学校のお手伝いさんではない。支援活動が便利屋さんになってはいけない。等。

### イ 継続的・安定的な学校支援活動にするためにはどうすればよいかをグループでまとめる

- ・ 教員や保護者に趣旨説明を行い、学校支援活動の効果を理解してもらう。
- ・ コーディネーターは、学校からの要望や要請に応じるだけでなく、学校と協力して工夫改善する必要が出てくる。
- ・ ボランティアを確保するため、頻繁に地域へ出向く。ボランティア連絡協議会とより一層連携を深めていく。
- ・ ボランティアの後継者育成と人材確保のために、保護者の世代にもボランティアに参加してもらうようなシステムを作っていく。
- ・ 学校支援活動の評価や振り返りを行い、成果と課題を明確にしながら推進していく。
- ・ 学校、ボランティア、コーディネーター合同による調整会議を開催し、共通理解のもとに進めていく。
- ・ 学校支援活動の精選が必要になってくる。限られた時間と人材の中でより有意義なものにしていくためにも、ねらいや効果をしっかり検証していくことが大切になる。等。



### 研修会の感想（参加者アンケートから）

- 現場からのお話が、とても参考になりました。それぞれの立場で感じる充実感や難しさは共通するものがあると感じました。今回の研修会を通して、他の地域の情報を教えていただいたので、様々な工夫を凝らして活動していきたいと思いました。
- グループ協議の時間がもう少し欲しかったです。他の市町村の取組状況や課題が聞けたのはとても良かったです。
- 他市町村で、どのような取組を行っているのか、どのような課題があるのかなど、様々な立場の方のお話を聞くことができ、良い機会になりました。